

「侍」と「候」——広義の御伽草子の場合

染谷裕子

はじめに

いわゆる丁寧語あるいは対者敬語としての「侍」と「候」についての交替については様々な論が発表されてきた。ともに謙讓語から転じた両語は、平安時代には「侍」が全盛期を迎え、後、院政鎌倉期に「候」¹との交替をみる。さらに「候」も室町期には様々な形に変化し、新しい形「ござる」等と交替していく、というのが通説である。

その通説の中でさまざまな問題点が指摘されてきた。上代における「侍」の待遇意識の存否、中古における「地の文」の「侍」の意味（歌集の詞書や日記など）、院政期以降の交替期における「侍」と「候」の敬度の違い、「候」優勢の時期に至っても文献によっては多用される「侍」の意味などが主なる問題点であろう。

本稿では、すでに口語の世界では、その末期には、「候」が新興の「ござる」等の勢力と交替していく室町時代に作られた物語である、御伽草子あるいは中世小説あるいは室町時代物語と呼ばれる多数の作品群を対象に、「侍」「候」の問題点について考えていきたい。

御伽草子の「侍」と「候」については、すでに武田孝氏の論稿⁽²⁾がある。

武田氏は狭義の御伽草子洪川板二十三編の「侍」と「候」を調査され、「候」の使用総数が「侍」の九倍強であること、「候」は会話文での使用が圧倒的であるが、「侍」は会話文より地の文での使用が多いことを指摘されている。さらに、特に「侍」について、会話文では、その末尾に、地の文では、物語の冒頭またはその近くに用いられることから、「侍」は「相手に向かって語りかける一種の姿勢を示す語としての役割」を持つのではないかという指摘をされている。「侍」を擬古的表現とみる説に対する疑問を提出されたのである。

この武田氏の結論が、広義の御伽草子にも適用できるかどうかが問題である。しばしば指摘してきたことであるが、洪川板御伽草子を「中世作品」として扱うには御伽草子の本文の変遷のうえで問題は多い。例えば、右の調査で「特例」とされる『二十四孝』以外の作品は、「候」の使用が「侍」より圧倒的に多いが、広義の御伽草子には、『二十四孝』のような「侍」のみ使用の作品や、「侍」優勢の作品もしばしば見られるのである。それらは、必ずしも『二十四孝』のような「漢文訓読調」の文体とは限らない。本文の変遷以外にも、洪川板の刊行者の、作品の文章の上での選択といった問題も考えられよう。御伽草子の国語学的研究を立場とする私としては、やはり広義の御伽草子を対象に再調査する必要があると思われるのである。

広義の御伽草子のテキストとして、『室町時代物語大成』一―十三(角川書店)を選んだ。御伽草子は数百編と言われている中で、四百十八作品を掲載した最大のテキストであり、本文をそのままに近い形で掲載しているからである。なお、同じ作品でも「異本」関係にある伝本も多数掲載されている。数量的に示す時は、それらを同じ作品としてではなく別の作品として扱うことを断っておく。

表A 「侍」と「候」の用例数 (伺候の「侍」「候」の用例数も参考までに示した)

①侍のみの作品		侍	地の文	会話文	消息文	*伺候「候」1
54	うたたねの草子 A写本	13	5	8		
64	恵心先徳夢想記 B康正3年写本	1		1		
68	ゑびす大こくかつせん F万治頃刊本	2		1	1	
78	おちくば A奈良絵巻	56	17	39		
105	祇園牛頭天王縁起 B長享2年本の室町写本	6	4	2		
156	子易物語 B寛文刊本	12	2	10		
164	嗟峨物語 B近世中期写本	19	11	8		
166	桜梅草子 F室町白描小型絵巻	12	3	9		
175	さざれ石 D絵巻	2		2		
213	申陽侯絵巻 C奈良絵巻	10	9	1		
214	すゑひろ物語 D寛文～元禄絵巻	4	2	2		
221	雀の夕顔 F寛永～寛文絵巻	2	2			
251	玉たすき G奈良絵本	8	8			
256	玉虫さうし F近世中期絵巻	1	1			
263	俵藤太草子 C室町絵巻	3	3			
272	調度歌合 F写本	32	28※	4		
299	鳥部山物語 B写本	43	12	30	1	
304	ねずみ草子 F室町絵巻	1		1		
344	武家繁盛 C寛文～元禄絵巻	4	4			

※判詞を含む

	侍	地の文	会話文	消息文	
352 仏鬼軍	F 元禄10年刊本	1	1		*伺候「候」1
354 不老不死	E 寛文～元禄絵巻	15	11	4	
360 平家花ぞろへ	C 江戸中期写本	1	1		*伺候「候」1
361 平家花揃	C 貞享3年刊本	1	1		*伺候「候」1
371 蓬萊物語	E 寛文～元禄絵巻	5	3	2	
372 蓬萊山由来	E 寛文4年刊本	4	3	1	
373 布袋物語	B 寛文～元禄絵巻	13	6	7	
376 ぼろぼろのさうし	B 寛永～正保刊本	1		1	
379 松ヶ枝姫物語	D 寛文～元禄絵巻	11	4	7	
382 松帆物語	B 正保・慶安頃刊本	29	5	24	*伺候「候」1
418 若みどり	D 寛文～元禄絵巻	5	2	3	

(注) 作品272は地の文28例中25例は「判詞」である。「御殿の、うのけの筆そ、かきつゝける」とあるので地の文に含めたが、グループア②の作品188の判詞は会話文脈中にあることから、「会話文」に含めた。

②侍優勢の作品

	侍	地の文	会話文	消息文	候	地の文	会話文	消息文	
17 阿漕の草子	A 明德6本の転写本	6	6		2		2		
18 朝白のつゆ	A 室町末絵入写本	41	34	7	4		4		
19 あしひき	B 室町絵巻	54	3	51	7		7		*伺候「候」1
25 雨やどり	A 奈良絵本	52	9	40	3	6	5	1	*伺候「候」3
28 天稚彦草子	F 室町模本絵巻	8		8	1		1		
36 いさよひ	B 奈良絵本	34		34	2		2		*伺候「候」1
52 有善女物語	B 室町後期写本	11		11	3		3		

	待	地の文	会話文	消息文	候	地の文	会話文	消息文	
56 梅津長者	D 模本絵巻	13	13		3		3		
57 梅津乃長者	D 近世初期絵巻	8	3	5	2		2		
58 梅津の長者	D 奈良絵本	3	2	1	1		1		
66 恵心僧都	B 室町写本	14	3	6	3		1	2	
72 大江山酒天童子	C 室町絵巻	31		31	1		1		
79 おちくぼのさうし	A 万治2年刊本	12		10	4		3	1	
81 音なしの草子	D 永禄13本模写絵巻	25	9	16	4		4		
89 かくれ里	E 寛文延宝頃絵巻	6		6	2		2		
97 賀茂之本地	B 承応頃刊本	13	11	2	4		4		* 伺候「候」1
99 唐崎物語	A 寛文頃写本	53	25	25	10	1	8	1	* 伺候「候」3
125 猷太平記	F 寛文頃刊本	16	4	12	2		2		* 伺候「候」1
141 弘法大師御本地	B 承応3年丹緑本	6	1	5	1		1		
160 西行物語	A 正保3年刊本	32	17	15	1		1		* 伺候「候」2
169 酒の泉	D 絵巻	23	17	6	1		1		
187 四十二の物あらそひ	A 古活字丹緑本	9	5	4	1		1		* 伺候「候」2
188 四生の歌合	F 古活字丹緑本	178	7	171※	1		1		※判詞を含む
191 しのびね物語	A 写本	110	1	104	1		1		* 伺候「候」14
222 硯わり	B 奈良絵本	78	30	46	2		2		
223 硯破	B 写本	53	33	20	4		4		
224 硯わり	B 奈良絵本	31	1	29	7		7		
227 住吉物語	A 古活字本	92	19	71	15		15		* 伺候「待」「候」各1
248 七夕物語	F 絵入写本	6		6	1		1		

「選」の「世」

		侍	地の文	会話文	消息文	候	地の文	会話文	消息文	
252	玉水物語	F 絵入写本	20	3	14	3	5		5	*伺候「候」2
267	稚児今参り	B 江戸前期奈良絵本	35	11	24	7	2		5	*伺候「候」6
279	つばめの草子	E 寛文頃絵巻	3	3		1			1	
280	つばの碑	D 絵巻	17	11	6	4			4	
296	道成寺物語	B 万治3年刊本	37	19	18	2			2	
303	ねご物語	F 江戸中期写本	15		15	1			1	*伺候「候」3
315	初瀬物語	B 江戸後期写本	20	1	18※	1	4		4	*伺候「候」3 ※絵詞を含む
318	花の縁物語	B 寛文6年刊本	55	14	40	1	1		1	
336	姫百合	F 江戸初期写本	14	3	10	1	6		6	
339	兵部卿物語	A 江戸後期写本	48	3	44	2			2	*伺候「候」5
341	福富物語	D 江戸初期絵巻	30	7	23※	1			1	※絵詞を含む
345	富士山の本地	B 延宝8年刊本	6	3	3	2	1		1	
364	弁の草紙	B 元禄8年本転写本	10		10	3			3	*伺候「候」1
381	松姫物語	A 大永6年絵巻	5	1	4	2			2	
391	虫妹背物語	F 享保2年絵巻	38	21	17	5			5※	※絵詞を含む
414	六波羅地蔵物語	B 寛文期以後絵巻	4		4	1			1	
415	わかくさ	A 寛文前後奈良絵本	95	8	86	1	26		25	*伺候「候」1

③候のみの作品

		候	地の文	会話文	消息文	
4	赤城の御本地	B 天保2年写本	23	0	23	0
12	秋夜長物語	B 天文9年写本	80	1	80	0
16	あきみち	C 奈良絵本	97	1	96	0

	候	地の文	会話文	消息文
22 愛宕地藏之物語	39	1	38	0
30 あやめのまへ	9	0	9	0
38 いそさき	22	0	22	0
42 いづはこねの本地	10	0	10	0
43 いづみしきぶ	8	0	8	0
48 岩竹	16	1	15	0
51 魚太平記	53	0	44	9
60 うらしま 下	32	3	29	0
61 うらしま	10	0	10	0
65 恵心僧都絵巻	1	0	1	0
77 大橋中将	13	1	12	0
80 御茶物かたり	14	1	13	0
83 おもかげ物語	25	1	24	0
87 蛙の草紙	37	0	37	0
88 鏡男絵巻	1	0	1	0
93 花鳥風月	60	0	60	0
94 花鳥風月の物かたり	7※	1	1	0
98 唐糸草子	37	2	33※	2
101 観音本地	33	0	33	0
103 祇王	17	0	17	0
104 祇園牛頭天王御縁起	18	6	12	0
111 貴船の本地	56	1	55	0

* 何候「候」1

※書写者の言葉 5 例

※謠いも含む

* 何候「候」1

	候	地の文	会話文	消息文	
112 きまん國物語	81	0	81	0	
122 車僧絵巻	4	0	4	0	
127 源海上人伝記	35	1	34	0	
131 還城楽物語	2	0	2	0	
133 小敦盛絵巻	71	1	70	0	
134 恋塚物語	49	0	35	14	
135 庚申之縁起	2	0	2	0	
136 かうしん之本地	2	0	2	0	
138 庚申之御本地	5	2	3	0	
139 強盗鬼神	3	0	3	0	
142 高野物語	179	1	171	7	*伺候「候」1
144 こをとこのさうし	16	4	12	0	
152 小町双子	2※	0	1	0	※書写の言葉1例
153 小町のさうし	1	0	1	0	
154 小町ものがたり	2	0	2	0	
158 金剛女の草子	12	2	10	0	
162 小枝の笛物語	51	0	49	2	
173 ささやき竹物語	23	2	21	0	
183 しぐれ	127※	5	118	2	※書写の言葉2例 *伺候「候」1
186 四十二の物あらそひ	2	0	2	0	*伺候「候」1
193 しみづ物語	64	1	53	10	
195 釈迦の本地	51	3	48	0	*伺候「候」1

	候	地の文	会話文	消息文
200 秀枯之物語	39	1	38	0
202 酒茶論	2	1	1	0
206 精進魚類物語	17	2	15	0
207 精進魚類物語	23	1	22	0
208 浄瑠璃物語	71	0	71	0
209 浄瑠璃御前物語	38	6	32	0
210 浄瑠璃十二段草子	66	0	66	0
212 神道由来の事	5	0	5	0
215 鈴鹿の草子	95	4	88	3
217 雀さうし	159	0	159	0
225 墨染桜	9	0	9	0
229 すはの本地	42	1	41	0
230 諏訪草紙	47	2	45	0
233 浅間御本地御由来記	51	0	51	0
234 善光寺如来本懐	45	10	35	0
235 善光寺如来本地	176	8	168	0
239 千手女物語	174	12	153	9
250 玉井の物語	11	0	11	0
253 たまむしのさうし	36※	2	8	22
261 為盛発心因縁集	29	0	29	0
262 為盛発心物語	32	0	32	0
266 竹生島の本地	37	5	32	0

※書写の言葉4例

「巻」の「世」

	候	地の文	会話文	消息文
269 中将姫本地	17	0	17	0
273 長宝寺よみかへりの草紙	328※	171	140	0
274 月日の御本地	80	0	80	0
275 つきみつのさうし	93	4	89	0
278 土蜘蛛草紙	2	0	2	0
285 てこくま物語	56	4	52	0
286 天狗の内裏	33	0	33	0
287 天狗の内裏	45	0	45	0
288 天狗の内裏	72	2	70	0
290 天照大神本地	42	6	36	0
298 常磐物語	36	0	36	0
300 長良の草子	1	0	1	0
302 七草ひめ	100	3	97	0
307 箱根権現縁起絵巻	35	0	35	0
308 箱根本地由来	25	1	24	0
321 花世の姫	220	2	218	0
324 はまぐりはたおりひめ	51	3	48	0
325 はもち	52	1	51	0
326 はもち中納言	59	0	59	0
328 彦火々出見尊絵	1	0	1	0
331 毘沙門天王之本地	45	0	45	0
332 美人くらべ	37	4	33	0

※書写の言葉17例

*伺候「候」1

	候	地の文	会話文	消息文
342 ふくろふ	F 江戸初期奈良絵本	0	23	5
343 ふくろうのそうし	F 明暦4年写本	1	44	36
346 富士の人穴の草子	E 慶長8年写本	1	21	0
347 富士の人穴草子	E 寛永4年丹緑本	5	34	0
349 藤袋草紙	F 室町末絵巻	0	2	0
357 文正草子	D 慶長元和頃奈良絵本	7	171	0
358 ふんしやう	D 慶長元和頃奈良絵本	4	195	0
362 弁慶物語	C 元和寛永頃古活字本	0	117	0
366 宝月童子	E 寛文頃奈良絵本	0	7	0
368 宝満長者	E 寛文5年刊本	1	21	0
369 ほうまん長者	E 寛文頃奈良絵本	0	45	0
378 ぼん天こく	B 寛文頃写本	0	19	0
380 松風むらさめ	A 万治2年刊本	0	25	8
385 まんじゆのまへ	C 寛文13年刊本	1	41	0
392 無明法性合戦状	F 大永7年写本	0	3	0
395 村松物語	C 寛文～元禄奈良絵本	0	134	0
400 もろかど物語	C 寛永6年写本	4	182	0
402 弥兵衛鼠	F 寛文頃絵巻	1	88	0
403 雪女物語	C 寛文5年刊本	1	79	0
405 横座房物語	B 江戸後期写本	0	3	0

*同候「候」1

④候優勢の作品

番号	作品名	種別	待	地の文	会話文	消息文	候	地の文	会話文	消息文	備考
1	あゐそめ川	B 寛文頃刊本	3	1	1	1	36		32	4	
5	あかしの三郎	C 天文23年写本	1	1			166	7	144	15	
6	あかし	C 寛永頃絵入刊本	2	1	1		125		109	16	
7	赤松五郎物語	A 大永6年写本	7	4	3		24	1	23		* 何候「候」1
8	秋月物語	A 江戸初期写本	28	2	26		320*	4	308		* 書写の言葉8例 * 何候「候」2
9	秋夜長物語	B 永和3年写本	1	1			80		80		
10	秋夜長物語	B 室町絵巻	1	1			83		83		
11	秋夜長物語	B 文禄5年写本	2	1	1		78		78		
13	秋夜長物語	B 室町末絵巻	2	2			67		67		
14	秋夜長物語	B 片仮名古活字本	3	2	1		66		66		
15	秋夜長物語	B 平仮名古活字本	1	1			75		75		
20	あしやのさうし	D 写本	1	1			5		5		
23	熱田の神秘	B 室町写本	1		1		4	1	3		
24	あま物語	A 近世初期奈良絵本	5	3	2		43	1	42		
26	あみだの本地物語	B 天文21年写本	12	2	10		38*	2	33		* 書写の言葉3例
27	あみだの本地	B 室町末写本	1		1		32		30	2	* 何候「候」1
29	雨若みこ	A 寛永頃写本	1		1		55	2	53		
32	鴉鷲記	F 文禄3年写本	13	7	4		200		188	12	
33	鴉鷲物語	F 寛永古活字本	13	7	5		195	1	183	11	
35	いけにえ物語	E 写本	1		1		91*	2	68	18	* 書写の言葉3例
40	殿島の本地	B 室町末写本	2		2		28		28		

	侍	地の文	会話文	消息文	候	地の文	会話文	消息文	
46 伊吹山酒頭童子	C 絵巻	4	3	1	98		98		* 伺候「候」1
47 伊吹山しゆてん童子	C 土佐絵本	8	1	7	78		78		* 伺候「候」3
49 いわや物語	A 慶長13年写本	22	5	16	61	6	55※	7	※絵詞を含む
50 岩屋の物語	A 室町末~江戸初期奈良絵本	1		1	120	3	110		* 伺候「候」1
53 うそひめ	F 慶安元年絵入写本	1	1	1	50	1	44	5	
55 うばかいは	D 奈良絵本	1	1	1	11	1	10		
62 うらしま	E 近世初期奈良絵巻	1	1		30	2	28		
69 えんがく	F 奈良絵本	2		2	6		6		
73 大江山しゆてん童子	C 寛文以後卷子本	18	2	16	58	4	54		* 伺候「候」1
75 扇合物かたり	A 室町写本	3		3	69	1	68		
76 扇ながし	A 延宝7年刊本	2		2	30	1	29		
84 おようのあま	B 奈良絵本	1	1		160	3	157		
92 花鳥風月	A 文禄4年奈良絵本	4	1	3	58		58		※書写の言葉3例
100 雁の草子	F 慶長7年絵巻	9	2	7	30※		27◇		* 伺候「候」1
102 勧学院物語	F 寛文9年刊本	1	1		25		25		◇絵詞を含む
108 木曾よし高物語	C 慶長9年写本	15	3	10	52	2	44	6	* 伺候「候」1
109 狐の草紙	F 室町絵巻	1	1		20			20	
110 貴船の物語	B 室町写本	2		2	60	3	57		
114 きりぎりすの物語	F 室町卷子本	1	1		45	2	43		
115 くちきざぐら	B 写本	2	2		30		30		
116 愚痴中将	A 元和寛永写本	11	2	9	57		57		
117 熊野の本地の物語	B 慶長奈良絵本	4	1	3	28	3	25		

「候」の「控」

	侍	地の文	会話文	消息文	候	地の文	会話文	消息文
118 熊野の本地	B 室町末絵巻	1	1		98	1	97	
119 熊野御本地	B 元和8年絵巻	1	1		18		18	
120 くまの、本地	B 寛永頃刊本	2	1	1	72	5	67	
121 熊野の本地	B 寛文～元禄絵巻	2		2	79	1	78	
123 くるま僧	A 写本	6	1	5	38	2	36	
124 鶏鼠物語	F 奈良絵本	5	4	1	15		15	
128 賢学草子	B 室町絵巻	2	2		10		10	
129 源氏供養草子	A 室町卷子本	5	4	1	30		30	
132 幻夢物語	B 寛文8年写本	3	1	2	156	2	147	7
140 興福寺の由来物語	A 室町写本	18	5	13	96	4	92	*伺候「候」2
145 小男の草子	D 室町末絵巻	2	2		27	2	25*	※絵詞を含む
146 小男の草子	D 慶長12年絵巻	1	1		5		5	
148 小式部	A 写本	2		2	18	2	16	
149 胡蝶物語	F 近世中期写本	2		2	27		27	
150 小伏見物語	A 寛永頃奈良絵本	15	3	12	67		53	14
151 小町歌あらそひ	A 万治3年刊本	2		2	22		22	
159 西行物語	A 永正6年写本	9	5	4	23	8	15	
161 西行の物かたり	A 江戸初期写本	6	2	4	62*	2	56	※書写の言葉4例
163 さがみ川	C 寛永6年写本	1	1		71	1	70	
167 桜の中將物語	A 江戸前期写本	36	11	22	104	1	95	*伺候「候」1
168 さくらの中將	A 寛文10年刊本	2		2	34		34	
170 さごろもの大將	A 室町末写本	45	1	43	216	5	205	6

	侍	地の文	会話文	消息文	候	地の文	会話文	消息文
171 狭衣の中將	2	1	1		116	1	115	
174 さゝやき竹	3		3		19		19	
176 さよごちも付ゑんや物語	3		3	1	60		60	6
177 さよひめのさうし	2	2			33	1	32	
178 さるげんじ	7		7		58	2	56	
180 三人法師	2	1	1		394		394	
181 塩竈宮の御本地	25	7	18		76※		75	
182 志賀物語	2	2			11		11	
184 しぐれ	26	8	18		124		121	3
189 じぞり弁慶	6	4	2		44		44	
192 しみづ吉高	4	2	2		108	6	88	14
194 しみづ物語	13	3	9	1	51	1	44	
196 釈迦の本地	1		1		57	3	54	
197 十二人ひめ	4	3	1		24	2	22	
198 十二類絵巻	14	3	11※		46	1	45※	
203 十本あふぎ	4	1	3		67	2	65	
216 鈴鹿の物語	3	2	1		203	6	188	9
218 雀の発心	1	1			30	2	28	
219 雀の発心	1		1		5	1	4	
228 諏訪の本地	1		1		193	4	189	
231 是害房絵	20		20		79		79※	
232 善界坊絵詞	13	1	12		70		70	

※書写の言葉1例

*同候「候」3

※絵詞を含む

※絵詞を含む

	侍	地の文	会話文	消息文	候	地の文	会話文	消息文	
236 善光寺本地	B万治2年刊本	3	3		35		35		
237 千じゆ女	A室町末写本	1		1	145	5	136	4	
238 千手御前物語	A近世初期奈良絵本	1	1		131		123	8	
241 大佛供養物語	B享禄4年写本	3	2	1	65	1	64		
242 大佛供養	B江戸初期絵入写本	1	1		37	2	35		
243 大佛の御縁起	E室町末写本	2		2	18	1	17		
244 大佛之縁起	E天和元年写本	4	1	3	14		14		
246 滝口物語	B江戸初期写本	2		2	7		7		
249 たなばたの本地	F寛永7年写本	13		13	43	1	42		
257 玉藻前物語	C文明2年写本	3		3	95		95		*伺候「候」4
258 玉藻の前	C寛文頃奈良絵本	1		1	94	2	92		
259 玉藻の草子	C承応2年刊本	2		2	94		94		*伺候「候」4
260 田村の草子	C寛永古活字本	1		1	60		60		
265 短冊の縁	G江戸中期写本	8		8	206	3	203		*伺候「候」「侍」各2
268 中将姫	A慶長前後絵巻	3		3	48		48※		※絵詞を含む
270 中書王物語	C江戸前期写本	11	10	1	38		38		*伺候「候」1
289 てんぐのたいり	C寛永正保丹緑本	2	1	1	42		42		
291 天神絵巻	B室町末絵巻	5	4	1	40	1	39※		※絵詞を含む
292 天神縁起	B江戸前期絵巻	1		1	26	2	24		
293 天神本地	B慶安元年絵巻	2	1	1	38	8	30※		※絵詞を含む
295 道成寺縁起	B室町絵巻	1	1	1	38※	0	37◇		※書写の言葉1例 ◇絵詞を含む
297 常磐の姥	D室町奈良絵本	1	1		6		6※		※絵詞を含む

	侍	地の文	会話文	消息文	候	地の文	会話文	消息文	
305 鼠の草子	1				138		135※	3	※絵詞を含む
306 鼠の草紙	8	1	7		56	1	55※		※絵詞を含む
309 橋姫物語	7	1	6※		39		39※		※絵詞を含む
311 鉢かづき	1		1		36	2	34		
312 鉢かづきの草子	2	1	1		37		37		
317 花つくし	2		2		29		29		
319 花みつ	6		6		20		13	7	
320 花みつ月みつ	1	1			91	1	71	19	
327 火おけのさうし	3		3		11		11		
330 びしやもん	64	1	63		174	4	170		*伺候「候」4
334 ーもときく	13	4	9		158	9	149		*伺候「候」5
335 ー一本菊	11		11		96	5	91		
338 百万ものがたり	1		1		8		8		
348 藤ぶくろ	10	6	4※		43		43※		※絵詞を含む
350 伏屋の物がたり	7	2	4	1	123	3	116	4	
353 舟のゑとく	1		1		4		4		*伺候「候」1
355 文正草子	18	1	17		117		117		*伺候「候」2
356 文正の草子	2	1	1		186	2	184		*伺候「候」1
359 文正草子	3	1	2		202	2	200		*伺候「候」1
363 弁慶物語	1	1			240	5	235		
365 判官みやこはなし	7		7		239	1	238		
367 法蔵比丘	1	1			28	4	24		

	侍	地の文	会話文	消息文	候	地の文	会話文	消息文
370 法妙童子	E 寛文8年刊本	1	1		60	2	58	
374 堀江物語	C 写本	11	2	9	63		46	17
375 堀江物語	C 寛文7年刊本	1		1	49		34	15
377 梵天圖	B 絵巻	2	1	1	45	1	44	
383 松虫鈴虫讃嘆文	B 室町末写本	1		1	10	1	9	
386 みしま	B 寛文～元禄奈良絵本	1		1	93	5	88	
387 みしま	B 室町末写本	6		6	30	1	29	
388 みなつる	C 寛永頃奈良絵本	4		4	15		15	
389 源藏人物語	B 室町末写本	6		6	14		13	1
390 源藏人物語	B 文化13年以後写本	2	1	1	80	6	74	
394 むらまつの物かたり	C 寛永頃写本	1	1		212	8	204	
397 物くさ太郎	D 寛永頃刊本	6	4	2	51	1	50	
398 紅葉合	F 江戸初期写本	6	4	2	47		42	
399 もろかど物語	C 江戸中期写本	1		1	122	3	119	5
404 ゆや物かたり	C 寛文頃松会刊本	1	1		25		25	
406 横笛草紙	C 室町後期絵巻	1	1		14		14	
407 横笛物語	C 室町末写本	1		1	30		30	
408 横笛滝口の草紙	C 古活字丹緑本	6	4	2	23		23	
409 よしのぶ	C 寛永～寛文奈良絵本	1		1	51	1	50	
410 頼朝	C 寛文～元禄奈良絵本	1	1		25	4	21	
411 羅生門	C 寛文頃絵巻	6	1	5	30		30	
412 るし長者	E 寛文～元禄奈良絵本	3	3		13	2	11	

*伺候「候」1

*伺候「候」1

	侍	地の文	会話文	消息文	候	地の文	会話文	消息文
413 六代	1		1		71		71	
416 わかくさ物語	10	1	9		59		59	
417 わかくさ	19	3	16		98	5	89	4

⑤侍候同程度の作品

	侍	地の文	会話文	消息文	候	地の文	会話文	消息文
2 青葉の笛	13	1	12		8		8	
3 青葉のふえ	4		4		7	2	5	
21 愛宕地蔵物語	49	32	17		37	9	28	
34 伊香物語	1		1		1		1	
37 石山物語	18	11	7		11		11	
39 一尼公さうし	8	2	6		10		10	
41 伊豆國奥野翁物語	6	2	4		7		7	
44 和泉式部	2		2		2		2	
45 伊吹山酒典童子	8	1	7		9		9	
59 浦風	36	6	30		43		43	
63 瓜子姫物語	5	4	1		4	1	3	
67 恵心僧都物語	14	4	7	3	14		11	3
70 役の行者	2	1	1		3	1	2	
71 えんま物語	19	4	15		7		7	
74 大江山酒典童子	57	3	54		90		87	3
82 大原御幸	16		16		9		9	
90 かざしの姫君	7	3	4		8		8	

「巻」と「世」

	侍	地の文	会話文	消息文	候	地の文	会話文	消息文	
91 花情物語	F写本	6	2	4	12		12		
95 かなわ	C元禄頃奈良絵本	10		10	16		16		
96 神代小町	A寛永頃絵巻	17	1	16	18		18		
106 祇園御本地	B明暦頃刊本	9	5	4	6		6		
107 衣更着物語	A貞享5年刊本	21		21	22	1	21		
113 京太郎物語	A写本	2		2	2		2		
126 月林草	F写本	5	2	3	4	1	3		*伺候「候」1
130 源氏供養物語	A室町末～江戸初期絵巻	6	1	5	5		5		
143 ごゑつ	E奈良絵本	2		2	4		4		*伺候「侍」1
147 こほろぎ物語	F近世中期写本	4		4	2		2		
155 子やオ物語	B近世中期写本	4	1	3	2		2		
157 木幡狐	F奈良絵本	18	1	17	17		17		
165 さくらぬ物語	C絵入複製本	317	2	314	323	1	321	1	
172 さごろも	A寛永頃丹緑本	44	4	40	69	1	68		*伺候「候」1
179 山海相生物語	F絵巻	13	5	8	18			18	
185 しぐれ	A寛永頃奈良絵本	94	6	86	66	0	65	1	*伺候「侍」1・「候」2
190 しのばすが池物語	B寛文8年刊本	21	1	19	23	1	16	6	
199 十人	A近世中期写本	9		9	6		6		
205 酒餅論	F元禄刊本後印本	2※			3		3		※書写者の言葉2
211 諸虫太平記	F刊本	15		15	12		12		
226 住吉縁起	B元禄写本	27	2	25	20	3	17		
240 大悦物語	D絵巻	5	3	2	5		5		

	侍	地の文	会話文	消息文	候	地の文	会話文	消息文	
245 宝くらべ	D 元禄奈良絵本	27	2	25	47		47		*伺候「候」3
247 セタ本地	F 江戸初期絵巻	11		11	10		10		
254 玉虫の物語	F 室町後期卷子本	1	1		1	1			
264 俵藤太物語	C 寛永頃刊本	21	5	16	19	1	18		※書写の言葉 1
271 鳥獣戯哥合物語	F 江戸後期写本	55		55	98※		97		※絵詞を含む
276 付喪神記	G 近世模写絵巻	8	5	3※	6		6※		
277 土ぐも	C 絵巻	4	1	3	8		8		
282 鶴亀松竹	D 奈良絵本	7	1	6	6	1	5		
283 鶴の扇	E 寛文以後写本	52	6	46	23		23		*伺候「候」1
284 鶴の草子	F 寛文2年刊本	19		19	25		25		
294 天満天神縁起	B 康暦2年写本	13	10	3	15		15		
313 八幡大菩薩御縁起	B 享禄4年絵巻	9	6	3	11		11		
314 八幡の御本地	B 承応2年刊本	7	5	2	10	1	9		
316 花子ものぐるひ	G 寛文延宝刊本	13		13	14		14		
322 はにふの物語	A 明応6年本転写本	117	45	72	189	1	76	112	*伺候「候」3
323 はまぐり	F 奈良絵本	7		7	12		12		
329 びしやもん	B 寛永頃奈良絵本	60	6	54	47		47		
333 日高川	B 慶長頃奈良絵本	26	14	12※	41	2	39※		※絵詞を含む
337 ひめゆり	F 寛文延宝松会刊本	18	2	14	13		13		
340 福富草紙	D 室町絵巻	9		9※	5		5※		※絵詞を含む
351 二荒山縁起	B 写本	1		1	1		1		
384 窓の教	A 江戸後期絵入写本	55	15	40※	38		38※		※絵詞を含む

	侍	地の文	会話文	消息文	候	地の文	会話文	消息文
393 むらくも								
396 目連の草紙								
401 文殊姫								

⑥ 「侍」も「候」も全く使われていない作品

- 31 蟻通明神のえんぎ B 奈良絵本
85 御曹司島わたり C 寛文頃絵巻
86 戒言 B 永禄元年写本
137 庚申之縁起 B 天文9年写本
201 酒茶論 G 室町末期写本
204 酒飯論 G 室町絵巻
220 雀の発心 F 室町末絵巻
255 玉虫の草子 F 寛永頃刊本
281 鶴亀の草子 D 寛文頃奈良絵本
301 七くさの草子 D 寛文頃絵巻
310 橋弁慶 C 奈良絵本

各作品の「侍」と「候」の使用総数は、表A（六三頁〜八二頁）に示した。これらの総数からはいわゆる「伺候」の意味を表すものは除いた。

また、表記は特に考慮していない。「侍り」「はべり」「はんべり」等は全て「侍」として、「ゆ」「候」「さぶらふ」「さうらふ」「さぶらふ」「さむらう」「さむらう」等はすべて「候」として扱った。なお、「さう」「そろ」の形も若干見えるが、これも「候」として扱った。

さて、全作品を次の様に分類して、示したのが表1である。

- ① 「侍」のみ使用の作品
- ② 「侍」が「候」より優勢の作品（両語の総数のうち七十%以上が「侍」）
- ③ 「候」のみ使用の作品
- ④ 「候」が「侍」より優勢の作品（両語の総数のうち七十%以上が「候」）
- ⑤ 「侍」も「候」も同程度に使用されている作品
- ⑥ 「侍」も「候」も全く使用されない作品

表1

作品数	分類
30	①
46	②
111	③
156	④
64	⑤
11	⑥
418	総数

④の「候」優勢の作品が最も多く、これに③の「候」専用の作品が次ぐ。この両方で全作品の約六割を超える。また、「候」は殆どが会話文での使用である。従って、御伽草子の文章では会話文を主体に「候」が用いられるのが一般的であるといえよう。が、問題は「侍」のみの作品や「侍」優勢の作品あるいは「侍」「候」使用が接近している作品も三割強あるということである。これらの「侍」は会話文・地の文どちらにも見え、その片寄りには作品による。どのような意図で、す

に口語の世界では、その勢力を失ったはずの「侍」が使用されたのか。「侍」の「候」との違いを考えるのが先決かもしれないが、その前に、作品の内容との関わりと本文の書写年代との関わりについて考えてみたい。作品の内容については、市古分類⁽⁴⁾を基準にした。すなわち「公家小説」「僧侶小説」「武家小説」「庶民小説」「異国小説」「異類小説」の六分類である。但し必ずしもすべての作品がこの分類で分けられるものではなく、二つ以上の分類にまたがることもしばしばあるが、便宜上どちらか一方に入れるという処置をとった。さらに『御伽草子集』（新潮日本古典集成）巻末の御伽目録に付された分類も参考にした。また、伝本の書写年代については、テキストである『大成』の解説によった。

(一) 市古分類との関わりについて

公家小説をA、僧侶小説をB、武家小説をC、庶民小説をD、異国小説をE、異類小説をF、以上の分類に入らないものをGとして、右の①～⑥のグループとの関連をみようとするのが次の表2である。

①～⑥のどのグループでも、Bの僧侶小説が多い。これは、テキストにBの類が多いことと共に、御伽草子全般においてBが多いことと関連するためである。Bの①～⑥の増減は①～⑥全体の増減と全く一致するので、Bに関しては①～⑥のグループとの関連については特に言えない。

最も顕著な傾向が見えるのは、Cの武家小説である。③④に集中している。なお①の作品では、殆どが地の文の「侍」である。②⑤の作品には、会話文の「侍」も見えるが、作品の多くは源頼光等を主人公とする前代の武士の物語である。Cの傾向に対して予想しうるのが、Aの公家小説が①②に集中するということであるが、これは予想に反して④が最も多い。しかしながら、Bを除く他の小説類に比べて、確かに②に多いことは言える。特に、擬古物語の系統をひく公家の恋愛談は②に多い。前代優勢の「侍」を使うことで、その公家という位相を打ち出そうとした作者の意図の表れであろう。が一方で、時代の流れをまぬがれず、中世化してしまっている公家小説も多い。完全な公家小説とみなすことができる『しぐれ』（永正十七年写本）や『美人くらべ』『中将姫の本地』等には「侍」の使用は全くない。

Dに関しては特にめだつた傾向はないが、①に属するDの作品は全て「祝儀物」である。また、①でEに含めた『不

計	G	F	E	D	C	B	A	
30	1	7	3	4	5	8	2	①
46	0	8	2	7	1	16	12	②
111	4	18	10	6	25	36	12	③
156	3	21	6	13	33	45	35	④
64	2	15	3	7	7	17	13	⑤
11	2	2	0	2	2	3	0	⑥
418	14	69	26	31	75	125	78	計

表2

老不死』『蓬萊物語』『蓬萊山由来』は、市古博士も指摘されているように「祝儀物」でもある。従って、①グループは「祝儀物」が七作品あることにもなる。「祝儀物」の舞台が古代であることと関連があるろう。

Eの異国小説は③に顕著な傾向を見せる。『きまん国物語』『還城国物語』『宝満長者』二本、『宝月童子』のような異国を舞台としたもの、地獄めぐりの『長宝寺よみかへりの草紙』『富士の人穴草子』二本、龍宮遍歴の『うらしま』二本がこのグループである。

Fの異類小説に関しては、Bと同じようなことがいえるが、③④に比較して①⑤が少なくない。「異類」は時に「公家」になり、時に「武士」にもなることが関連するであろうが、むしろ「人間」ではない「異類」であることが「侍」使用と関連する可能性もある。

⑥のグループの十一作品は特に市古分類との関連については言えない。(表A⑥参照)なお、①⑤グループに入れたものの、その用例数が極端に少ない作品がある。今仮に「侍」「候」が一例以下ものを拾ってみる。(数字は作品番号)

- 64 恵心先徳夢想記 256 玉虫さうし 304 鼠草子 352 仏鬼軍 360 平家花ぞろへ 361
- 平家花揃 376 ぼろぼろのさうし (以上①)
- 65 恵心僧都絵巻 88 鏡男絵巻 135 庚申之縁起 152 小町双子 153 小町のさうし
- 154 小町ものがたり 300 長良の草子 328 彦火々出見尊絵 (以上③)
- 34 伊香物語 254 玉虫の物がたり 351 二荒山縁起 (以上⑤)

⑥の作品と右の作品の中には、『玉虫のさうし』『鼠草子』『恵心先徳夢想記』『鏡男絵巻』などのように非常に短い作品もあり、「侍」「候」の登場する余裕もないといったものもあると思われる。が、注意したいのは、御伽草子の殆どの作者が不明である中で、わずかに作者が推定されている作品が右の中にいくつか見えることである。『酒茶論』は妙心寺第五十二世蘭叔玄秀の著作であり、『酒飯論』は

一条兼良の作とも言われ、『仏鬼軍』は一休宗純の作とも言われる⁶⁾。一方で、書写者として254『玉虫の物がたり』は後土御門院勾当内侍が、281『鶴亀草子』は誠仁親王が伝えられているが、市古博士は「中には筆者即作者といふ場合もあるかもしれない」と述べておられる⁷⁾。最初に述べたように、⑥グループは(右のようにたとえ用例数の少ない作品を加えても)御伽草子の膨大な作品のほんの一部にすぎない。そういう中にこのような作品があることは興味深い。

(二) 伝本の書写年代との関わり

御伽草子の歴史は長い。松本隆信氏は「御伽草子の時代は、およそ十四世紀はじめから十八世紀初頭まで約四百年の長きにわたったと見てよいだろう」と述べておられる⁸⁾。テキストの四百十八作品の中でも、書写年代が明らかなもの古いものは永和三年(一三七七)の『秋夜長物語』から、新しいものでは弘化四年(二八四七)の『諏訪草紙』までかなりの幅がある。これらの書写年代(ほとんどは書写推定年代)と、①⑥とは関連するのだろうか。また、写本や絵巻などの形態との関わりはあるのだろうか。

①⑥のグループに古写本がどの程度含まれるか。『大成』の解説で、室町時代までの写本(慶長期も含める)とみなされている作品数は、四百十八作品中百十五作品である。これを①⑥で見ると、上の表3の通りである。

各グループに古写本は存在するが、③④に多い。それぞれのグループの総数に対する割合から考えても、①②⑤に比較して③④に多いことがいえる。③④の古写本の多くで、会話文中でおびただしい「候」が使われている。この点から考えても、御伽草子本来の文章では、会話文中に多くの「候」が使われるのが普通であるといえよう。

次に、写本、絵巻、奈良絵本(土佐絵本・奈良絵巻も含める)、刊本、古活字版がどのように分布しているかをみようとしたのが次の表4である。

③④⑤では写本の形態が最も多いのに対して、①や②では絵巻の形態がめだつ。特に①はその傾向が顕著で、六割の作品がこの形態である。しかも、この殆どが寛文か

総数	古写本	
30	5	①
46	7	②
111	33	③
156	53	④
64	13	⑤
11	4	⑥

表4

総数	古活字本	刊本	奈良絵本	絵巻	写本	
30	0	7	1	15	7	①
46	3	8	7	14	14	②
111	7	25	15	16	48	③
156	5	27	25	32	67	④
64	0	15	16	11	22	⑤
11	0	1	3	3	4	⑥

ら元禄の頃に作られた絵巻である。従って、①の「侍」には近世の雅語意識からの「侍」も含まれると考えてよさそうである。

さて、次に同じ内容の作品の伝本を比較してみることにする。

(1) 伝本が異なっても「侍」「候」の勢力が変わらない作品(数字は『大成』の作品番号を示す)

次の作品がこの類に入る。①②にくらべて③④が多い。

「平家花揃」(360・361) 「蓬萊物語」(371・372) 以上①

「梅津長者」(56・57・58) 「硯破」(222・224) 以上②

「小町の草紙」(152・153) 「精進魚類物語」(206・207) 「浄瑠璃物語」(208・210)

「玉井の物語(彦火々出見尊絵)」(250・328) 「為盛発心物語」(261・262) 「月日の

本地(つきみつ)」(274・275) 「伊豆箱根の本地」(42・307・308) 「はもち」(325・

326) 「富士人穴草子」(346・347) 「宝満長者」(368・369) 以上③

「あかしの三郎」(5・6) 「あみだの本地」(26・27) 「鴉鷲記」(32・33)

「いけにえ物語(法妙童子)」(35・370) 「いわや物語」(49・50) 「熊野本地」(117

・121) 「胡蝶物語(花つくし)」(149・317) 「小伏見物語(桜の中將)」(150・167・168) 「是害房絵」(231・232) 「大

仏供養物語」(241・244) 「玉藻前物語」(253・256) 「天神絵巻」(291・293) 「鼠の草子」(305・306) 「鉢かづき」(311・

312) 「花みつ月みつ」(319・320) 「一本菊」(334・335) 「堀江物語」(374・375) 「みしま」(386・387) 「横笛草子」

(406・408) 以上④

「青葉の笛」(2・3) 「八幡宮縁起」(313・314) 以上⑤

(2) 同じ作品であっても伝本によって「侍」「候」の勢力が異なる作品

a その異なり方がそれほど大きくない作品 (①②相互または③④相互の入れ替わり)

次にあげる作品は「候」専用の伝本と、多数の「候」に若干の「侍」がまぎれこんだ伝本がある作品である。

- 「秋夜長物語」(9-15) 「うそひめ(ふくろう)」(53・342・343) 「うらしま」(60・61・62) 「花鳥風月(扇合物語)」(75・92・93) 「貴船の本地」(110・111) 「恋塚物語(滝口物語)」(134・246) 「小男の草子」(144-146) 「ささやき竹」(173・174) 「さよひめ(竹生島の本地)」(177・266) 「釈迦の本地」(195・196) 「鈴鹿の草子(田村の草子)」(215・216・260) 「千手女」(237-239) 「中将姫」(268・269) 「天狗の内裏」(286-289) 「弁慶」(362・363) 「梵天国」(377・378) 「村松物語」(394・395) 「もろかど物語」(399・400)

③が先か、④が後かというようない言えないが、この若干例紛れ込んだ「侍」は「候」とは異なる特別な意味を持つ場合も多い。会話文では話者が普通の人間でない場合(精霊や霊の降りた巫女など)が見られ、地の文では「冒頭」や「最終文」での使用に当てられる。すなわち、ある意図をもつての「侍」使用と思われる例が多い。

右とは異なり、「候」専用の伝本以外に、「候」を脅かすまではいかにしてもかなりの「侍」が見られる伝本を持つ作品がある。これらをあげてみる。

木曾義高(清水物語)

浅間御本地(源藏人物語)

108 慶長9年写本	④	侍15	候52	389 室町末写本	④	侍6	候14
192 慶長頃写本	④	侍4	候108	390 写本	④	侍2	候80
193 寛永14年写本	③	侍0	候64	233 安永2写本	③	侍0	候51
194 寛文延宝頃刊本	④	侍13	候51				

ふせやの草子(美人比べ)

藤袋

350 室町末写本	④	侍7	候123	348 室町末絵巻	④	侍10	候43
332 万治2年刊本	③	侍0	候37	349 室町末絵巻	③	侍0	候2

文正草子

357 慶長元和頃大型奈良絵本	③	侍 0	候 178
358 慶長元和頃横型奈良絵本	③	侍 0	候 199
355 寛永前後奈良絵本	④	侍 18	候 117
356 寛永頃刊行丹緑本	④	侍 2	候 186
359 江戸時代前期写本	④	侍 3	候 202

右を見ると、④からの③へという時代の傾向をある程度うかがえるように思う。が、『文正草子』の場合はどうだろうか。特に355番の伝本が気になる。「侍」の大多数は会話文での使用で話者の片寄りも見られない。なお、『おちくぼ』は①と②の伝本がある。寛永頃まで遡れるかもしれないという奈良絵巻と、万治2年の刊本である。前者は「侍」のみの使用が56例、後者は「侍」が12例、「候」が4例見える。これは「侍」衰退化の傾向といつてよいだろう。

b 伝本によって「侍」「候」の勢力がやや異なる作品

④と⑤の伝本がある作品は、『伊吹山酒天童子』(45-47)、『源氏供養草子』(129・130)、『小式部(和泉式部の物語)』(44・148)、『狭衣の草子』(170-172)の四作品であり、②と⑤の伝本がある作品は『ひめゆり』(336・337)、『福富草紙』(340・341)の二作品である。伝本が下るにつれて、⑤から④へ、②から⑤へという「侍」衰退の傾向を予想したが、そう単純にはいかない。例えば、『狭衣の草子』と『福富草紙』の例をあげてみる。

狭衣の草子

福富草紙

170 室町末写本	④	侍 45	候 216	340 室町絵巻	⑤	侍 9	候 5
171 慶応2年写本	④	侍 2	候 116	341 江戸初期絵巻	②	侍 30	候 1
172 寛永頃刊丹緑本	⑤	侍 44	候 69				

「侍」と「候」

二作品の「侍」の殆どは、会話文である。特に『福富草紙』の江戸初期絵巻の「侍」の使用の大部分は絵詞中である。後述するが、御伽草子の絵詞中では専ら「候」を使用するのが普通である。従って、『福富草紙』は特異な作品といわざるをえない。また、「公家小説」の代表的作品である『狭衣の草子』は、その前代的要素を残そうとする作品と中世化してしまっている作品がある。従って、単純に御伽草子において「侍」衰退の傾向をみいだそうとするには無理がある。

c 伝本によって「侍」「候」の勢力にかなり違いのある作品
 次の六作品は、時代の下る伝本ほど「候」の勢力が極端に増す。

『愛宕地蔵物語』(21・22) 『七夕の本地(雨若みこ)』(29・247・248・249) 『恵心僧都絵巻』(65〜67) 『車僧(松姫物語)』(123・381) 『俵藤太草子』(263・264) 『びしゃもん』(329〜331)
 例を二つあげてみる。

七夕の本地(雨若みこ)

びしゃもん

247 江戸初期絵巻	⑤	侍 49	候 37	329 江戸初期写本	⑤	侍 59	候 47
248 絵入写本	③	侍 0	候 39	330 江戸前期写本	④	侍 64	候 137
249 寛永7年写本	④	侍 13	候 43	331 承応3年刊本	③	侍 0	候 45
29 寛永20年写本	④	侍 1	候 55				

『大江山酒天童子』と『土くも』も「侍」の勢力は衰えないものの「候」増加の傾向にあるといつてよい。

大江山酒天童子

土くも

72 南北朝絵巻	②	侍 31	候 1	278 南北朝絵巻	③	侍 0	候 2
73 寛文ころ絵巻	④	侍 18	候 58	277 絵巻	⑤	侍 4	候 8
74 近世中期卷子本	⑤	侍 57	候 90				

一方、右とは逆に、近世の伝本で「侍」が勢力を増してくる作品も多い。

『十二類絵巻（獸太平記）』（125・198）『賢学草子（道成寺縁起・日高川）』（128・295・296・333）『西行物語』（159・160）『しぐれ』（183～185）『秀祐之物語（はまぐり）』（200・323・324）『玉水物語』（252・398）例を二つあげてみる。

賢学草子（道成寺縁起・日高川）

しぐれ

128 室町後期絵巻	④	侍 2	候 10	183 永正17年写本	③	侍 0	候 125
295 室町絵巻	④	侍 1	候 38	185 寛永頃奈良絵本	⑤	侍 94	候 66
333 慶長期頃写本	⑤	侍 26	候 41	184 正保慶安頃刊本	④	侍 26	候 124
296 万治3年刊本	②	侍 37	候 2				

次のような、古写本のない作品にも、近世の伝本で「侍」がかなり多く使われているものがある。

子やす物語

若草物語

155 近世中期写本	⑤	侍 4	候 2	415 寛文前後奈良絵本	②	侍 94	候 27
156 寛文元年刊本	①	侍 12	候 0	416 寛文7年刊本	④	侍 10	候 59
				417 寛文頃写本	④	侍 19	候 98

以上のことから、伝本の時代が下るにつれて、「候」が優勢になっていく場合と「侍」が復活する場合という全く逆の現象が存在することがわかる。もちろん、各作品の一部の伝本を見ただけにすぎない。新しい伝本でも古い本文を伝えている可能性も十分ある。が、御伽草子の長い歴史の中で、前代の名残である「侍」と、近世に入ってから雅語意識による「侍」使用が混在しているために、このような複雑な現象が見られるということが言えるのではないか。

三 「侍」と「候」の違い

各作品において「侍」と「候」の違いを見てきたが、この二語の違いがあるのか。次にその点について考えてみたい。

(一) 会話文における「侍」と「候」

まず、「侍」専用の①グループと「候」専用の③グループの作品を見ると、それぞれの語の出現度の違いに気付く。①で最も「侍」の用例数の多い作品78『おちくぼ』の一節を示す。中将のセリフである。

佛のくるはしにや、侍りけん、心もすみて、あちきなく、侍りしかは、たうとき山々、寺々、おかみありき侍りしを、とかむる人、さらになし 思ひかけぬ、六かくたうに、つやして侍りしに、あまはらの、あつまりて、我はんへらぬゆへに、殿下の御なげきにて、御出家あるへし、北のまん所は、おもひたへす、おはしますと聞きはべりて、けんせ、後生、そんなぬる身にこそ、侍りつれ、ち、は、に、けうするとこそ、かたからめ、物を思はせ、奉ること、心うきことなり、神明こへたうのおそれも、つみふかしとおもひて、まいりはんへるなり

次は③で最も「候」の用例数の多い作品323『長宝寺よみかへりの草紙』の一節である。

御ことつて、申たくゆ、われは、たしまの、あかのかこにて、なをは、しゆんちよと申しゆ 悉なみの、かうらいしに、ゆしか、おもひよらす、とうしゆくのか、てにかゝり、かつせんたうの、くをうけ、かなしくゆ、二しんに、さきたちゆとて、なげかれゆか、ほむらとなり、身にかかりゆと、二しんのかたへ、御つたへゆて給ゆへ かつせんの、くるしみをは、とんしやにては、たすかりゆへし、あにの、みんふきやうにも、かうらいしの、はうすへも、此よし、おほせゆて給ゆへ、酒ゆは、中く、むやくにてゆ

③の「候」の方が多用されることが明らかであろう。このような例は③の中でも多い。一方、①では、右の『おちくぼ』のように「侍」が多用される例はむしろ珍しい。「侍」は「候」ほど気軽に使用できる語ではないことがわかる。

また、会話文のみの使用は③に圧倒的に多く、その用例数も①に比べ極めて多い。

「侍」と「候」

表5 絵詞を含む作品

	本文中の「侍」	絵詞中の「侍」	本文中の「候」	絵詞中の「候」
②初瀬物語(315)	18	3	4	4
②福富物語(341)	23	1	1	0
②虫妹背物語(391)	17	0	5	5
④岩屋の物語(50)	1	0	110	58
④雁の草子(100)	7	0	27	21
④小男の草子(145)	0	0	25	16
④十二類絵巻(198)	11	1	45	44
④是害房絵(231)	20	0	79	26
④中将姫(268)	3	0	48	17
④天神絵巻(291)	1	0	39	20
④天神本地(293)	1	0	30	6
④道成寺縁起(295)	0	0	37	27
④常磐の姥(297)	0	0	6	6
④鼠の草子(305)	0	0	135	104
④鼠の草紙(306)	7	0	55	14
④橋姫物語(309)	6	1	39	37
④藤ぶくろ(348)	4	1	43	43
⑤付喪神記(276)	3	1	6	1
⑤日高川(333)	12	2	39	19
⑤福富草紙(340)	9	9	5	5
⑤窓の教(384)	40	9	38	35

ところで、御伽草子には絵詞のある作品がある。絵の説明をしたものもあるが、絵の中の人物のセリフが書かれていることも多い。これらと、本文の会話文には違いがあるのだろうか。セリフのある絵詞（以下単に絵詞と呼ぶ）を持つ作品は、「侍」専用の①と「候」専用の③グループには一つもない。②に三作品、④に十四作品、⑤に四作品ある。

『福富草子』だけが例外で絵詞中「侍」優勢である。異本の『福富物語』もこの影響があるかと思われるが、他の作品では「候」が優勢である。しかも、一部の作品を除き右の作品の多くは御伽草子が多く作られた室町期の写本である。これは、その成立がかなり遡れると思われる『福富草子』を除き、御伽草子の時代には「候」の方が口語的であったことを意味する。すでに、現実の世界では古語となった「侍」は物語の本文中に置き、そのような古語とは縁のない者は、絵を見ながら、セリフを楽しむという方向が示されているように思われる。絵詞には本文に見られないような言い回しが多々見られることと同様である。ただし、すでに室町期には見られたはずの「候」の変形（もっとも漢字表記をどう読むかは定かではないが）、「ソロ」「ソウ」等の形は次の作品以外は見ない。これは、絵詞とはいえ、物語である以上、口語を豊かに表現するには限界があったことを意味するのではないだろうか。

（翁）　うは御せんの、をとなけなきことをも、のたまふ物哉、うは御前の、わたしまうてのちより、女には、され事も、しさうぬ物を（348藤ぶくろ）

なにか、まいらて、そうらうへき、まいりそうと、いふまゝに（285てこくま物語）

軍の用意可_レ有_レ候（392無名法性合戦状）

次に両語が共用されている②④⑤の作品を通して、「侍」と「候」の違いについて考察する。

②グループの作品は、会話文においても、若干の作品（17・58・97・279）を除いて、「侍」が優勢である。そこで、劣勢にある「候」について、「侍」との違いがあるかどうかについて考えてみる。まず、会話文の話者と対者を見ると、「候」のほとんどは「侍」のそれと一致する。すなわち、殆どの作品で、同じ会話文（もしくは同じ話者と対者）で共用しているのである。共用していない作品及び共用している作品の中でも「候」専用の話者に対する聞き手を見てみると、おおよそは、帝などの身分の高い相手、主人または主人に準ずる相手、または親に対してなど、上位者に対しての

傾向をみることができる。

また、「候」「侍」ともに尊敬語が上接することがある。

やかて又こそ御上ゆはめ (19あしひき)

御出ゆけるそ (72大江山酒天童子)

あさ夕、御心くるしく、侍るなり (25雨やどり)

御らんせさせ侍らんすらめ (227住吉物語)

②の46作品中24作品の「候」に、8作品の「侍」に尊敬語が接続している。その数は、それぞれの用例数を考慮すれば、あきらかに「候」の方が尊敬語に接続する割合は高い。尊敬語に接続している「侍」は、「あしひき」を除き、近世以降の伝本である(19・25・99・191・223・227・318・415)。このような傾向は②以外の「侍」「候」にも言える。なお、「侍」は本来聞き手側の表現には使わないのが原則であるが、桜井光昭氏によれば『撰集抄』には尊敬語につく「侍」があり、これは口語「候」の「侍」に対する影響であるという¹⁰⁾。

以上のことから、②のグループでは、「候」が「侍」よりある程度敬度が高いということがいえる。

次に④のグループについて考えてみたい。このうち、35作品では会話文での「侍」はなく、わずかに「侍」一、二例が地の文中で用いられる。これ以外の作品では「候」と共に、少数ながら会話文での「侍」が見られる。個々の作品量にもよるが、比較的「侍」の用例が多い作品をあげてみる(会話文での「侍」使用が10例以上。数字は会話文での「侍」と「候」の用例数)。

「秋月物語」(26・308) 「あみだの本地物語」(10・33) 「いわや物語」(16・55) 「大江山しめてん童子」(16・54)

「木曾義高物語」(12・50) 「興福寺由来物語」(13・92) 「小伏見物語」(12・67) 「桜の中將物語」(25・103) 「さ

ごろもの大将(44・211) 「塩竈宮の御本地」(18・75) 「しぐれ」(18・124) 「是害房絵」(20・79) 「たなばたの本地」

(13・42) 「びしやもん」(63・170) 「一本菊」(11・91) 「文正草子」(17・117) 「わかくさ」(16・93)

半分が、市古分類の「公家小説」である。また、『大江山』『興福寺』『塩竈』にしても、その時代は平安であり、登

場人物は公家が多い。右の作品では、ほとんどが「候」と共用されており、その差が明確でない場合が多い。このことから、「侍」は公家およびそれに類似する人々の位相語として捉えてよいのではないかと思われる。

一方、公家以外の話者とはいかなるものか。④全体の作品についてみると、話者のもう一つの特徴として、神仏や天人(23・29・73・306・309・377・387・399・407)、故人の霊(6・40・49・108・216)、昔人(7)、動物や植物の変化(100・140・259・317)、あるいは動物そのもの(118)、すなわち人間以外のものの使用が見られることである。

(観音が長者に) なんち、あまりに、こなきことを、なけき、かなしむほとに、ふひんに、はんへりて(387みしま)

(故母君の霊が) こりはつるまで、しらせんと、かくまであらはれはんへるなり(49いわや物語)

(夢の中に二条の后が現れて) 御車もうつもれて侍るらん(7赤松五郎物語)

(雁の化身の男が女に) いのちなからへ侍らは、又こんあきと、たのめとも(100雁の草子)

(虎狼が武士たちに) そむき申すへきにもはんへらす(118熊野の本地)

また、『鴉鷲記』や『花鳥風月』等で、巫女が霊がのりうつる前は「候」使用であるのに対して、のりうつってから「侍」を使用する例が見られることも、右のことと関連する。

以上のことから、「侍」の話者とは、公家の場合も含めて、御伽草子の時代において「普通の人間ではない」ということが言えるのではないか。それは一見、公家のことばと虎狼のことばと同一視することに矛盾があるようだが、一面では古きよき時代の特権階級のことばであり、一面ではすでに古くさい時代遅れのことばともとらえれば矛盾はないように思う。作品24『あま物語』では田舎の海女(およびその父母)専用のことばとして、作品178『さるげんじ』では鱈売り専用の言葉として用いられているのは、後者の一面で捉えることができる。

ところで、「侍」と「候」に全く待遇差が見られないわけではない。「侍」の多くは、恋人、夫婦、兄弟姉妹、あるいは同等の人物同士での使用が多いことは確かであるが、一方で話者が帝や大王であったり、高貴な人物が武士に、あるいは主人が従者にといった例が見られる。これらは対称代名詞ナンヂと共用されることが多い。話者が「候」専用になることはなく、また、逆の関係では専ら「候」専用となることが多い。

(河原の局が武士に) せんそのしうくんの、おほせをそむき侍るや (8 秋月夜物語)

(中将が従者おといに) なんぢもわれにそい侍ると思ひて (184 しぐれ)

(頼光が綱に) 家のたからなれ共、なんちに、あつけ侍るそや (411 羅生門)

(大子がこんていこまに) なんぢは、むまといへども、そのうへあり、しかはんへるべき、ちぎりや、しかくのところへ、ゆかん (330 びしゃもん)

(帝が太郎に) なんぢは、まことに、れんがの上すにてはんへるなる (397 物くさ太郎)

また、『あみだの本地』で、最初は、僧姿の太子に対して大臣は「なんぢはいかなるものにてはんへるそ」と言い、その正体が太子だとわかってからは「かやうに申すものは、いにしへ、ひたりにめされゆへし、ひちやうくわんの大しんと申ての物にてゆ」と名乗っている。このように会話の途中で「侍」から「候」に変化している例が見られることも、この二語の待遇差を示しているといつてよい。

しかしながら、帝に対して「侍」を使用することもある。(170・249・387)

(大臣が帝に) きかれゆは、かやうのこと、申ましく侍れとも (170 さころもの大将)

(蔵人が帝に) いなかへくたり、おやのゆくへを、たつねたく候へとも、申しかねはんへる (387 みしま)

また、先にふれたような、田舎の海女や鱈売りが目上の人物に対して「侍」を専用している例もある。また、対者が特定できない場合の「侍」も多い。このことから、「侍」はすでに待遇語という意識が薄れ、位相語としての意識に重きが置かれているように思われる。

次に⑤の作品の「侍」と「候」について考察していく。⑤の作品中、全く会話文に「侍」のない作品254『玉虫の物語』を除き、これ以外の作品の会話文での「侍」と「候」の使用状況を見ようとするのが次の表6である。表中、A～Fは、話者の同一の聞き手に対する「侍」と「候」の使用状況を示す。すなわち、Aは「侍」「候」を共用しているかどうか、Bは「侍」専用の会話があるかどうか、Cは「候」専用の会話があるかどうか、Dは「侍」専用の話者に対して、相手は「候」専用で応じているか、Eは「侍」専用話者に対して相手は「侍」「候」共用で応じているか、Fは「侍」「候」

「侍」と「候」

表 6

⑤における侍候使用状況（会話文）

	侍	候	A	B	C	D	E	F
2 青葉の笛	12	8	○		○			
3 青葉のふえ	4	5	○					
21 愛宕地蔵物語	17	28	○	○	○			○
34 伊香物語	1	1		○	○			
37 石山物語	6	11	○	○	○	○		
39 一尼公さうし	6	10	○	○				
41 伊豆國奥野翁物語	4	7		○	○			
44 和泉式部	2	2		○	○			
45 伊吹山酒典童子	7	9		○	○			
59 浦風	30	43	○	○	○	○	○	○
63 瓜子姫物語	1	3		○	○			
67 恵心僧都物語	*10	*14	○	○	○		○	
70 役の行者	1	2	○		○			
71 めんま物語	15	7	○	○	○			
74 大江山酒典童子	54	*90	○	○	○		○	○
82 大原御幸	16	9	○	○				
90 かざしの姫君	4	8	○	○		○		
91 花情物語	4	12	○	○	○			
95 かなわ	10	16	○	○	○			
96 神代小町	16	18	○	○	○		○	
106 祇園御本地	4	6		○		○		
107 衣更着物語	21	21	○	○	○			○
113 京太郎物語	2	2	○	○	○		○	
126 月林草	3	3		○	○			
130 源氏供養物語	5	5	○		○			○
143 ごゑつ	2	4	○	○				
147 こほろぎ物語	4	2	○	○				
155 子やす物語	3	2		○	○			
157 木幡狐	17	17	○	○				
165 さくらゐ物語	*315	*322	○	○	○	○	○	○
172 さごろも	41	68	○	○	○		○	
179 山海相生物語	8	*18	○	○	○			

「侍」と「候」

	侍	候	A	B	C	D	E	F
185 しぐれ	*88	*66	○	○	○	○	○	
190 しのばずが池物語	*20	*22	○	○				
199 十人	9	6	○	○	○			
205 酒餅論	2	3			○			
211 諸虫太平記	15	12	○	○	○			○
226 住吉縁起	25	17	○	○	○			○
240 大悦物語	2	5	○		○			○
245 宝くらべ	25	47	○	○	○		○	
247 七夕本地	11	10	○	○	○			
264 俵藤太物語	16	18	○	○	○		○	
271 鳥獣戯哥合物語	55	97	○	○	○			○
276 付喪神記	3	6		○	○	○		
277 土ぐも	3	8	○		○			
282 鶴亀松竹	6	5		○	○	○		
283 鶴の扇	46	23	○	○		○		
284 鶴の草子	19	25	○	○	○	○	○	
294 天満天神縁起	3	15	○	○	○			○
313 八幡大菩薩御縁起	3	11	○	○		○		
314 八幡の御本地	2	9	○	○	○	○		
316 花子ものぐるひ	13	14	○	○	○			
322 はにふの物語	72	*188	○	○	○		○	○
323 はまぐり	7	12	○		○			
329 ひしやもん	54	47	○	○	○		○	
333 日高川	12	39	○	○	○			
337 ひめゆり	*16	13	○	○	○	○	○	
340 福富草紙	9	5		○	○			
351 二荒山縁起	1	1		○	○			
384 窓の教	40	38	○	○	○			○
393 むらくも	3	4	○					
396 目連の草紙	8	5	○	○	○	○		
401 文殊姫	60	*137	○	○	○		○	○

*印は「消息文」も含む。

共用の話者に対して相手は「候」専用で応じているかを表す。

右の表によれば、ほとんどの作品で「侍」と「候」が共用されていることがわかる。従って、一見この二語には違いないように思われる。しかし、BとCが存在し、さらに、DEFのような状況が見られる以上、何らかの違いは存在するのである。

さて、BCを比較してみると、BC共に身分的にも心理的にも差のない相手に用いることも多いが、Bの場合は、その話者が、帝や主人などの身分的上位者、貴人、神仏（の化身）であることがめだち、一方Cは、その話者が、臣下、従者などの身分的下位者、賤人、神仏への祈誓者であることがめだつ。すなわち、「侍」は対等以下に、「候」は対等以上という傾向がうかがえる。但し、この傾向は「候」の方が「侍」より顕著である。

「候」の場合、親（又はそれに近い人物）が子にというような例を除けば、例外は極めて少ない。

次の例は、確かに目下に用いた例であるが、このような例はきわめて少ない。命令形となることが多い。後者は、古写本を近世になってから写したという奥書きのある本であるが、前者をはじめ比較的新しい伝本に多い。

（相模守が摂津の目代に）いな郡、山田八かうの者、一かうより、一人つゝ、まいり^いへと申さるへし（165さくら物語）

（大納言殿が北の方を通して姫君のめのと弁の局に）まゐりて、をりをりなくさめ^いへ（322はにふの物語）

なお、西田直敏氏によれば、『平家物語』でも「候」は目上に用いるのが普通であり、例外として「依頼や命令、使者を通しての伝達、書簡」で目下に用いることがあるという。¹¹この傾向は御伽草子の場合も全く同様である。

一方「侍」の場合は、先の傾向に反する例外も少なくはない。すなわち、目上に用いる例も見られる。第一の例のように古写本にも例外が見える。

（和泉式部が帝に）神の御事にこそ、千はやふる、とは申侍れ、これはてうるい、つはさの事也、さていさめて、侍るなり（44和泉式部）

（あやしのおきなが守護に）ゆめゆめ、さやうの事、侍らす（63瓜子姫物語）

（おくりの源太が主人左衛門に）のこりの女はう、にけは、にかし侍るへき、あるし、をきあひ侍らは、たち所にて、

うしなふへし（283 鶴の翁）

（藏人が中将に）やよひも中はすき侍る、うつろふ花の、御さかりを、つれつれと、暮したまはんにも侍らす（384 窓の教）

しかし、先の「候」は目上に「侍」は目下にという傾向はDEFからもうかがうことができる。すなわち、Dでは「侍」専用話者の方が「候」専用者より、Eでは「侍」専用者の方が「侍」「候」共用者より、Fでは「侍」「候」共用者の方が、「候」専用者より、身分的に又は心理的に優位者である場合が多い。これらの優位者は帝、主人等の身分的上位者や神仏である場合が多く、先にあげた「侍」の傾向と一致する。ただし、この傾向はD、E、Fの順に顕著である。

以上の他、語りの「侍」と、手紙文の「候」について述べておく。

次の例は、児が業平に対して語る物語の中で見える「侍」である。

大わう、おうきによるこひ、らいはい、くやう申て、たち給ひ、すなはち又、むまにのり、はんへりしかは、……しかる所に、しとうとゆふ、大わう、ごちようあひの、物あり、かの物、御るすのうちに、あやまつて、御まくらをこへはんへりぬ（青葉の笛）

このような例が、話者・聞き手の関係とは別に、時折見えるのも「侍」の特色の一つである。⑤に限らず、会話文の「侍」に時折見える。この「侍」は地の文の「侍」と関わりがあると思われる。

また、先の表6には手紙文の場合も会話文に含めたが、手紙文の場合は「候」専用としてある作品が一つある。179『山海相生物語』と322『はにふの物語』である。他の作品では「侍」を使用した手紙文も見られるが、これらの作品には多くの手紙文（艶書）が見え、「候」専用が徹底している。

以上、②④⑤を中心に会話文の「侍」と「候」の差を探ってみた。まとめれば、次のように言える。

一、会話文では「候」の方が「侍」より敬度が高い。

これは、「候」優勢の中世における通説と何ら変わりがない。桜井光昭氏が、『今昔物語集』において、「侍」から「候」

へという時代的傾向が見える中で、「侍」より「候」の方が敬度が高いことを実証して以来、それ以後の鎌倉時代の作品を対象とした調査でも同様な傾向が報告されている。佐藤武義氏の『宇治拾遺物語』による考察¹³、黒沢幸子氏による『宇治拾遺物語』『古今著聞集』『十訓抄』『沙石集』による考察¹⁴、さらに宮内健治氏の『とはずがたり』による考察¹⁵等である。室町期以降の作品では地の文での「侍」の考察が主であるが、武田氏は『徒然草』や『御伽草子』（渋川板）では二語の差はすでに曖昧と見ておられる¹⁶。が、確かに説明しようがない曖昧な例も少なくないが、特に「候」に関しては目上へという傾向ははっきり残っているように思われる。「侍」が複雑な様相を見せるのは、右の様々な考察でも同様のものである。もつとも、白川洋子氏が述べておられるように、この二語の待遇差は、「候」の用法の拡大化と関連しているとも思われる。すなわち、本来話し手側の表現に用いるこの二語のうち「候」は現在の「です」「ます」と同じように、聞き手側の表現にも用いるようになったことである。が、先に述べたように御伽草子では（「候」ほど顕著ではないが）「侍」もその用法が拡大してきており、ますます「侍」の用法が複雑になっている。

二、その話者について、特に「侍」は公家または田舎者または（擬人化した場合を除いて）人間以外の存在に用いることがある。これは「侍」の話者が一般的な人間とは異なることを作者が意図したものと思われる。

前述の桜井氏は『今昔』で「候」には「中央的」「貴族的」「当代的」色彩が濃く、「侍」には「地方的」「庶民的」「前代的」色彩が濃いと述べられた¹⁸。しかし、御伽草子の時代すでに公家は中央から完全に退いている。この点が二のような傾向を導いているものと思われる。また、『平家物語』では山田巖氏の指摘しておられるように、「侍」の話者は「現実離れした」人物（老翁・異邦人・霊）に限定されている¹⁹。この時代、公家もまた現実離れした人物なのではなからうか。なお、前述の佐藤氏や黒沢氏は「侍」「候」それぞれの位相について述べておられる。例えば、『宇治拾遺物語』で、佐藤氏は、「侍」の聞き手の大勢は庶民階層であるのに対して「候」は官位のあるものであるという²⁰。黒沢氏も大体同様な傾向を指摘しておられる²¹。が、御伽草子の場合には必ずしも同様とは言えない。公家同士の会話で「侍」が多数用いられているからである。作品や時代の差が関係すると思われる。ただ、黒沢氏が女性に「侍」使用が多いことを指摘されている²²が、諸氏により指摘されているフェミニニズム的傾向の「候」の問題²³とともに興味深い。今はふれないが、御伽

候	侍	
	25	①
4	34	②
55		③
87	101	④
18	43	⑤

(数字は作品数)

表7 地の文の「侍」と「候」

草子にもその傾向があるように思われる。

三 会話文ではやはり「候」優勢の状況が普通であり、特に登場人物のセリフを記した「絵詞」では特にその傾向が強い。このため、「侍」は語りのような特別な役割を果たすことがある。

ここで問題なのがやはり「侍」である。一や二で説明しかねる「侍」の中には、単純に「候」に置き換えられないような場合があるように思う。それは、森繁敏氏²⁴や今井正氏²⁵が「徒然草」を対象に述べられたような「侍」という敬語自体の問題、武田氏の述べられたような「文体」としての問題が関わるように思われる。実は「侍」においては、この点について最も論ずるべきであると思われるが、今はふれないことにする。

(二) 地の文の「侍」「候」

表7は、地の文における「侍」と「候」の見える作品数を①～⑤のグループごとに示したものである。これによれば、地の文においては「侍」の出現する作品の方が「候」の出現する作品より多いことがわかる。また、それぞれの用例数を会話文の用例数と対照させると、地の文の「候」は若干例にすぎないが、地の文の「侍」の用例数は会話文の用例数を上回ることもある(全作品の二割強で地の文の「侍」の方が会話文のそれより多い)。さらに、「候」は地の文専用ということはありえないが、「侍」は地の文専用となる作品(四十七作品)も少なからず見られる。以上のことから、「侍」は地の文においては「候」より優勢であるといえる。

さて、右のような地の文の「候」の使用状況から考えれば、地の文の「候」の大半は、「作者の不注意や、無意識的な筆の運びにもとづいて、口頭語が文章語の中に混入したものである」とされる²⁷のも無理はない。文脈が通じない部分や前後に会話文の「候」が使用されている部分に見えることがあるからである。一例をあげてみよう。

さるにても、やかてかへらせ給は、先いはゐて、九こんひとつ、まいらせ

ゆはむと、の給ひゆへは、た、ひとりまたせたまひゆはんも、ひんなけれども、すこし、ゆわぬまいらせんといふに、なにとして、とりよせゆやらん、やなきの、すくれたるをとり出し、(88およのあま) 書写者の誤写ということも十分考えられよう。

しかしながら、明らかに意図的に使用した「候」も少なくはない。これらは、作品の結末に位置し、明らかに作者の読者に対する働きかけであると言える。

まことに、ありがたかりける、事ともなり、御念佛を御ゑかうあるへくゆ、あなかしく(133小敦盛絵巻)

さて、いまのよまでも、こいをする人は、天神と、さいのかみとに、きせい申せは、たちまちに、ふうふの事は、女をとこ、ともに、かなふなり かまへて、よく、たのみゆへし(144こをとこのさうし)

しよてん、三ほうの、かこあつて、今生、後生、ともに御たすけあるへき事、うたかゝるあらず、ゆはんなり(200秀祐之物語)

また此ほけきやうを、よまぬ人にてゆは、くりかへしく、ねんふつ申て、こしやうほたひを、こいねかふへし、すこしも、ゆたんあるへからすゆものなり(268竹生島の本地)

なお、書写者の言葉に見られる場合もある。

ほんのこことく写し申しゆ ふしんともおほくゆ なをしかるへくゆ(26あみだの本地物語)

文末以外にも、段落の初めに使用されることもある。

おりふし、そのころ、大御所様、御たいさまの、葉のふろのゆに、かのからいとも、御供申て、参られける(98唐糸草子)

その、ち、御花見も。すきゆへは。みなく。つほねくへかへり。(120くまの、本地)

また、物語中で、作者が説明をしたり感想を述べたりする場合に見られることもある。

むかしもいまも、けひし、けほのなかの、いしからぬとは申つたへてゆへとも(237千じゆ女)

あんらくしへ、とひけるによりて、とひ梅とは申しゆへ(291天神絵巻)

まことに、身のけよだつて、ありがたく。しゆせうにこそさふらへ（368宝満長者）

これらは後に述べる「侍」とほとんど変わらない。そして、このような意図的な「候」は③や④の作品に見えることが多い。これらの作品は全く「侍」がないか、もしくは極端に用例が少ない。従って他のグループで「侍」が果たす役割を果たしているといえる。

なお、地の文の「候」が比較的多い作品は、古写本であることが多い。

ところで、『長宝寺よみかへりの草紙』のみ、地の文の用例数が極端に多い。これは、生き返った者が、その死後の世界の体験をそのまま語った作品である。従って、地の文の「候」としたが、会話文の「候」とみなしてもよいと思われる。作者の語り手の作品には「侍」を地の文で使用する作品（『阿漕の草子』や『桜梅草子』等）もあるが、この場合、作り物語というより実体験（または実体験の見せかけ）という意識の表れと思われる。このような作品は他にはない。

さて、「侍」は明らかに文章語としての役割を持っていることを先に述べた。今もう一度、地の文のみで「侍」を使用する作品を見てみると、①（侍専用）では七作品、②（侍優勢）では二作品、④（候優勢）では三十四作品、⑤（侍候同程度）では一作品ある。地の文の「侍」なしの作品が、①②⑤④の順にその割合が増えていくように、「侍」の勢力を考えれば、地の文の「侍」のみの作品の割合は、①②⑤④の順に減少することが予想される。が、②⑤の割合が低いのに対して、①のみならず④でも二割強の作品に地の文使用のみの「侍」が見られる。④は「候」の用例数が極めて多いのに対して、「侍」は若干例しか見えない作品がほとんどである。右に指摘した二割強の作品の「侍」の用例も、一例もしくは二例程度である。さらに、この多くが、冒頭もしくは結末に用いられている。すなわち、これらの作品では「侍」の役割がかなり限定されていることになる。冒頭または結末の地の文で「侍」を一度は使い、本文中の会話文で「候」を多用するという、御伽草子の文章の一つの型ができあがる。そして、このような型の作品が実は後世の渋川板に目立つように思われるのである。

ところで、冒頭または結末に「侍」が用いられるのは④に限られるわけではない。

むかしか今にいたるまで、めてたき事に、いひつたへ侍るは、かの不老ふ死の葉に、まさる物はなし（354不老不死）

人は、身におうせぬ、くはほうを、うらやむましき、事になん侍る(341福富物語)

おうゑいのころの、ことなるに、おわりのくに、いはくらのさとに、なるせのさへもんの、きよむねと申人、侍りけるか、(55うばかは)

されは、むかしより、いまに、目出度ためしには、さ衣の大しやうの御事をこそ、申つたへ侍りけれ(170さごろもの大将)

今もむかしも、神仏につかうまつり、よろつ、なさけおはします人は、行すゑ、めてたく侍なり(25雨やどり)

ただし、中世説話や渋川版御伽草子に指摘されるほど、右の傾向は顕著ではない。①のグループに多いが、全体的には二割程度である。また、これらの中には、作者の姿勢を示した次のような例もある。

かやうに、くわほう、めてたき人の、すゑの世までの、ためしにもとて、しるしをき侍り(63瓜子姫物語)

むかしも、いまも、かゝるふしきの、事なれば、かきつたへはんへるなり(146小男の草子)

また、冒頭や結末以外でも、段落の初めに表れる場合もある。

そのころ、せひめいといふ、まさしきさうにん侍りけり(47伊吹山しゆてん童子)

そののちは、たかひに、こころをのこさす、うちとけ、水魚の思ひを、なし侍りき(27土ぐも)

以上のことから、武田氏の指摘されるように「侍」は「相手に向かって語りかける一種の姿勢を示す」語としてとらえてよいと思われる。

その他、「申す」「語る」等を連結する場合、和歌や漢詩を口にする場合は「侍」が使われる。言葉を他に向けて発する場合は、ある種の心構えが必要である。会話文に見られた「語り」の「侍」と同様の傾向の表れである⁽²⁹⁾。

しかしながら、右以外の例も多数見られる「侍」をどのように説明すればよいのか。黒沢氏は『愚管抄』や『沙石集』の「侍」は「自己側の事を述べる文に限定されている」と指摘された⁽³⁰⁾。が、御伽草子の場合は、むしろ作品中の人物・事物・場面の描写に用いられる場合がほとんどである。

あおやきは、わかつほねへ、かへり侍る(18朝貞のつゆ)

かたはらのくさむらに、かけをもとめて、かくれ侍けり（21愛宕地蔵物語）

みなみな、御ひさちかく、なみゐて、ちやうもんしまいらせる、心ちして侍るなり（140興福寺の由来物語）

駿河國富士の麓野、浮嶋原を前に当て、清見関に宿して侍りけるに（267依藤太草子）

かのひやうふきやうのみや、なかのきみへの、御むかへもかきりあれば、かくこそ、おもひあはせられて、のこりと、まり侍るも、なくさむ心ちして侍りけり（267稚児今参り）

「侍」に下接する助動詞を、「侍」の用例数が比較的多い作品（十例以上）について見ると次の表8のような結果となる。「けり」に接続することの多い作品もあるが、下接なしの場合（助動詞に接続しないで終わるかまたは助詞に接続する場合）が多いことに気付く。

これはどういうことを意味するのだろうか。黒沢氏は、地の文の「侍」について『古今著聞集』は「説話内の登場人物・事物・場の描写等、説話描写の文における使用」がかなりの比率を占める一方、『沙石集』では「自己側の事柄を記載する場合に限定される」と指摘された³¹。また、白川氏は『宇治拾遺物語』などの六作品の地の文の「侍」の下接語を調査された³²。そのうち、『古今著聞集』と『沙石集』のみを抜粋させていただくと、次の表9のようになる。

客観描写の多い『著聞集』では「けり」が多く、自己側のことに限定されている『沙石集』では下接助動詞なしが多いことがわかる。ところが、御伽草子の場合、客観描写が多いのに、下接助動詞なしが多いことになる。これは、御伽草子では、客観描写もまた自己側のことのように記述することを意味するのではないか。

そして、それは一種の語りの姿勢とも考えられるのである。

表 8

作品 番号		下接なし	き	けり	その他の助動詞	総数
18	朝白のつゆ	28	0	0	6	34
21	愛宕地蔵物語	20	1	8	3	32
37	石山物語	2	4	3	2	11
78	おちくぼ	9	5	3	0	17
97	賀茂之本地	2	6	2	1	11
99	唐崎物語	14	0	9	2	25
160	西行物語	6	3	7	1	17
164	嵯峨物語	3	1	3	4	11
167	桜の中将物語	5	0	4	2	11
169	酒の泉	9	3	4	1	17
222	硯わり	13	5	7	5	30
223	硯破	13	6	5	9	33
227	住吉物語	4	0	15	0	19
267	稚児今参り	3	0	6	2	11
270	中書王物語	3	4	1	2	10
280	つぼの碑	0	1	10	0	11
294	天満天神縁起	1	1	7	1	10
296	道成寺物語	13	1	1	4	19
299	鳥部山物語	8	1	2	1	12
318	花の縁物語	13	1	0	0	14
322	はにふの物語	7	0	27	11	45
337	日高川	8	1	3	2	14
354	不老不死	5	4	2	0	11
391	虫妹背物語	17	2	1	1	21

うらめしさを、なげきはんへり候（311鉢かづき）

もはや、「侍」は対者敬語というよりは位相語としての働きに重きがあるといつてよい。

一方、地の文においても「候」は「侍」に影響を及ぼしている。が、それは会話文に見られるほど「侍」を浸食することはなかった。これは、「会話文」の「侍」とは違う「文章語」としての役割が「侍」に確立しているからであると思われる。この文章語としての「侍」の役割をさらに論ずべきであろうが、もはや紙幅に余裕がない。稿を改め論ずる予定である。

註

- (1) 森野宗明氏によればその交替期は十一世紀後半に遡ることができるという。「丁寧語「候ふ」の発達過程について——中古・院政期初頭における状況——」（『国語学』68・昭42・3）
- (2) 「御伽草子における「侍り」の用法」（『解釈』22・11・昭51・11）
- (3) 女性語と言われる「さぶらふ」は、御伽草子でも大体女性使用であるが、男性使用も見られる。「さむらふ」についてはどちらとも言えない。なお、表記による「候」の使い分けもある程度あるように思われるが、ここではふれないことにする。
- (4) 『中世小説の研究』（東大出版会）
（5・6・7）注（4）参照
- (8) 『御伽草子集』（新潮古典集成）
- (9) 拙稿「御伽草子絵巻の絵詞」（お茶の水女子大学『人文科学紀要』38）
- (10) 「撰集抄の侍り」（『国語学』99・昭49・12）
- (11) 「平家物語の「候ふ」（『国語と国文学』45・2）
- (12) 「今昔物語集の「候」と「侍り」（『国語学』40・昭35・3）
- (13) 「国語史上からみた「宇治拾遺物語」の「侍り」と「候ふ」（『国語と国文学』50・11・昭48・11）
- (14) 「中世説話集における待遇表現の研究——「候ふ」「侍り」を中心に」（『文学論藻』50・昭50・12）

- (15) 「とはすがたりの丁寧語「侍り」と「候ふ」」(『解釈』25・4・昭54・4)
- (16) 注(2)参照
- (17) 『宇治拾遺物語』における「侍り」と「候ふ」の一考察(『香川大学国文研究』3・昭53・9)
- (18) 注(12)参照
- (19) 「平家物語の用法と語法」(『国文学 解釈と鑑賞』22・9・昭32・9)
- (20) 注(13)参照
- (21・22) 注(14)参照
- (23) 「若林俊英氏「沙石集」の会話文における「侍り」と「候ふ」」(『湘南文学』12・昭53・3) また、注(15)の論文で宮内氏も指摘されている。なお、敬語の「フェミニズム的傾向」を指摘されたのは森野宗明氏である。(『講座国語史』5 敬語史「古代の敬語Ⅱ」大修館書店)
- (24) 「つれづれ草の「侍り」をめぐって——敬語を規定する「公」と「私」」(『女子大國文』8・昭33・2)
- (25) 「徒然草における「侍り」の用法」(『宇部短大学術報告』17・昭56・2)
- (26・27・28) 注(2)参照
- (29) 但し、「申す」等の接続、和歌や漢詩の引用、あるいは語りの場合にも「候」が見えることがある。
- (30・31) 注(14)参照
- (32) 注(17)参照